

歴博 くらしの植物苑だより

第100回くらしの植物苑観察会 7月28日(土)

市民のためのくらしの植物苑
辻 誠一郎(東京大学新領域創成科学研究科)

くらしの植物苑のこれまで

くらしの植物苑は1995年9月に開苑したので、今年の9月で12周年を迎えることになります。くらしの植物苑の歴史を洗いなおしてみると、おおむね次のような時期に分けることができると思います。

1995年～1998年 第1期：基本的な整備の時期

1999年～2004年 第2期：「伝統の植物」展示を具体化した時期

2005年～2007年 第3期：市民のための多様化の時期

第1期は開苑して間もない時期で、植栽した樹木の健康状態や畑の栽培植物のローテーションを確立する時期でもあったと思います。くらしの植物苑となる前は、住宅に利用されていたこともあり、地下には当時の施設の基盤が埋もれていました。道路が通されていたところは土壌もなく、樹木の生育には最悪の状態でもありました。やがて元気がなくなり、枯れてしまうこともあったのです。植物苑に相応しい土壌に入れ替え、枯れたものや不適なものを入れ替えるという落ち着かない時期でもあったのです。畑の栽培植物も、近世から近代にかけての、ちょっと昔の畑作主体の農業を醸す方向を固めていった時期だと思います。こうして植栽樹木や畑の栽培植物も安定してくる中で、毎年のみどりの日に開催してきた植物苑案内を、定期的にもっと頻繁に開催してもいいのではとの声が高まってきたのです。それが形となったのが、1998年4月のみどりの日からスタートした「歴博くらしの植物苑観察会」でした。これが第2期への第一歩であったことは疑う余地がありません。

第2期は、これまでに整備できたゾーニング植栽と畑栽培を「常設展示」と位置づけ、日本の植物文化史を彩ってきた古典園芸植物あるいは伝統の植物展示を「季節展示」と位置づけ、歴博における植物文化史の研究成果を「季節展示」に結び付けていこうとした時期です。くらしの植物苑の「企画展示」といってもよいものです。これは「くらしの植物苑5ヵ年計画」としてスタートしました。その第1年目に「伝統の朝顔」を設定し、第2年目・第3年目に、ヒョウタンとメロン、古典菊などを候補に挙げていたのです。結果的に「伝統の朝顔」は毎年開催されることになり、夏以外の春・秋・冬を「伝統のサクラソウ」、「伝統の古典菊」、「冬のサザンカ」という「季節展示」として四季をカバーしていくことになったのです。古典園芸植物の収集と展示が軌道に乗り始めた時期であり、歴博らしい植物苑活動の基本ができたといえるでしょう。2001年か

らは企画展示「海をわたった華花」の開催に向けた共同研究がスタートし、毎月の観察会の話題にも共同研究の成果が反映されるようになりました。企画展示の構想には、本館、佐倉城址公園、くらしの植物苑を連続一体のものとし、歴博と佐倉市が連携する「佐倉歴史植物苑（仮）」構想が盛り込まれていました。また、2002年度から2005年度までの3年間にわたって、くらしの植物苑の生きている植物を材料に、体験教室を試みた時期でもありました。ボランティア活動のあり方を模索する体験教室でもありました。

第3期は、まさに市民のためのくらしの植物苑とするための多様化の時期であると言えます。体験教室を支えたボランティア活動を、「くらしの植物苑だより」の編集という地味ながら普及を支える活動へ移行したのです。くらしの植物苑と本館を結びつける試みとして、偶数月は本館講堂にて「日本の植物文化を語る」をテーマに講演会を、奇数月はくらしの植物苑にて「くらしの植物苑観察会」を開催しました。講演会は、たくさんの写真映像や絵図などを資料に、くらしの植物苑では話しきれないような話題を取り上げ、観察会では季節のくらしの植物苑を活用できる話題を取り上げて、活動の多様性を模索したのです。結果的に、くらしの植物苑での観察会を毎月開催するというもとのスタイルに落ち着いてきました。第2期にスタートした夏の「伝統の朝顔」は歴博の企画展示としてすっかり定着し、他の季節の伝統植物の展示とともに第3期にも引き継がれています。「伝統の朝顔」は、今年も7月24日～9月2日の異例の1ヶ月以上にわたって開催されています。第9回を迎えたのです。

市民のためのくらしの植物苑

「植物園」という施設は、人の生活に深くかかわっている植物に対して認識を深めるために設けられたもので、ギリシャ時代にはすでに存在していました。植物がもっている資源性を探り出し、また、有用な資源植物を保存するという役割を担ってもきました。大航海時代以降のヨーロッパの重要な植物園はその大役を果たしてきました。日本の重要な植物の資料や標本、生きたままの植物体が、今もヨーロッパの多くの植物園に保管・保存されていることを知っている人は意外に少ないようです。国立歴史民俗博物館のくらしの植物苑は、まだ12年に満たない歴史しかないとはいえ、縄文時代以来、人が深くかかわってきた植物群を生きたまま保存し、とくに再現が困難とされる近世・近代に作り出された伝統の植物群を保存し、その植物文化とともに「生きている文化財」として活用を図っていかうとしています。植物文化史を彩ってきた多様な植物群は、絶えず人が関わり続けなければ絶滅してしまう運命にあります。「生きている文化財」とは、人の深いかわりなくしてはありえないものなのです。市民が深くかかわっていく仕組みがなければ、絶滅に瀕しているたくさんの歴史的遺産が一瞬にして消えうせてしまうのです。ともに歩む道をくらしの植物苑を拠点に考えていかなければなりません。

次回予告 第101回くらしの植物苑観察会 2007年8月25日（土）

「変化朝顔の世界」 仁田坂 英二（九州大学）

10:00～12:00（予定） 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料